

梗概

The Relationship Between Early Childhood English Education
and Communication Strategy Use

9E13001

長野 理瑛

本修士論文は、EFL環境において英語を学習する児童を対象にコミュニケーション方略の使用について検証した。この論文における研究課題は以下の4つである。①児童は会話を持続させるためにコミュニケーション方略を使用しているのか。②もし児童がコミュニケーション方略を使用しているならば、どのような種類のコミュニケーション方略を、またどれくらいの頻度で使用しているのか。③児童のコミュニケーション方略の使用頻度と英語能力には相関関係があるのか。④児童はコミュニケーション方略を学習して使用するようになるのか、もしくは母語（日本語）から転移して使用するのか。

本研究は、縦断的研究である。調査方法は、教室観察、質問紙調査、英語能力評価の三種類を使用した。対象者は英会話教室に通う7人（6歳から12歳）の児童である。教室観察においては、独自に開発した観察規準を使用しながら、半年間の児童の様子を観察し、コミュニケーション方略の使用を分析した。質問紙調査は、事前・事後の二種類の質問紙を児童の保護者に対して行った。英語能力評価に関しては、英会話教室の指導者が、話す・聞く・読む・書く・発音・英語に対する態度の6つの能力を評価した。

本研究の結果から、以下のことが発見された。(1) 児童はいくつかの種類のコミュニケーション方略を使用していた。(2) 児童が最もよく使用するコミュニケーション方略は非言語的なストラテジー、日本語中心とした回避ストラテジー、会話を維持す

るストラテジーであった。(3) 児童があまり使用しないコミュニケーション方略は、中間言語ストラテジー、英語で助けを求めるストラテジーであった。(4) 具体的な方略に関しては、シャドーイング、沈黙、日本語で質問に答える、日本語で質問する、ジェスチャーを使う、アイコンタクトをよく使用していた。(5) 児童のコミュニケーション方略の使用には個人差が存在した。(6) 児童のコミュニケーション方略の使用は、助けを求める役割、インプットを発生させる役割、より詳しい情報を聞き出す役割、興味があることを示す役割があると考えられる。(7) コミュニケーション方略の使用と英語能力の関係においては、一部の期間において、非言語的なストラテジーと4つの英語能力の間にそれぞれ有意な負の相関、また発音能力と3つのコミュニケーション方略、さらに発音能力と全体的なコミュニケーション方略の間にそれぞれ有意な負の相関がみられた。(8) 児童が使用するコミュニケーション方略のほとんどは第一言語から転化したものと考えられる。(9) 児童によるコミュニケーション方略の使用は、第一言語における日常の経験を基盤としている可能性がある。

EFL 環境において英語を学習する児童においても会話を維持するためにコミュニケーション方略を使用している。非言語的な方略や日本語を基盤とした回避方略を活用しながら、会話している姿が見られた。コミュニケーション方略を使用することで、会話における問題を解決することが可能であり、英語学習を促進させる。コミュニケーション方略は、コミュニケーション能力を育成する媒介となりうるであろう。